

自己評価動機の顕現化が自己評価過程における他者選択と精神的適応に及ぼす影響

西村 太志

広島大学大学院生物圏科学研究科

A study of the self-evaluation process: An examination from the viewpoints of self-evaluation motivations and reference to other persons and mental adaptation.

Takashi NISHIMURA

*Graduate School of Biosphere Science, Hiroshima University,
Higashi-Hiroshima 739-8521, Japan*

キーワード：自己評価過程、他者選択、精神的適応、自尊心

第1章 自己評価過程に関する研究の現状と本研究の目的

われわれは、日常生活の中の様々な出来事を契機として自己を認識する。その際に、必要があれば新たな自己概念を形成し、また既存の自己概念を肯定化しようとする。人は自分自身を取り巻く状況を認識し、その情報を元に新たな情報を収集したり、判断することによって、自己概念を修正や確認しながら新たな自己概念を構築する。この過程を自己評価過程 (Sedikides & Strube, 1997) と呼ぶ。この自己評価過程に関する近年の研究においては、複数の自己評価動機が存在しそれらの存在が、自己にどのような影響を及ぼすのかについての検討の必要性が指摘されはじめている (e.g., Taylor, Neter, & Wayment., 1995; Sedikides & Strube, 1997)。しかしながら従来の検討において、自己評価と対人相互作用、そして自己の適応の三者関係について、それらを一連の過程として扱ったものはほとんど見受けられない。またこの一連の過程に関して、状況的要因の影響を考慮した検討はほとんど行われていない。そこで本研究では、自己評価動機の顕現化が、自己を取り巻く対人的環境へのアプローチにどのような影響を及ぼし、翻ってこのことが自己の精神的適応感にどのような影響を及ぼすのかという一連のプロセスを検討することを目的とする。

特に、本研究では自己評価過程における自己査定と自己高揚の関連性について検討し、さらにそれをふまえた上で、自己評価過程と適応との関連性を自己関連情報の源としての他者との対人相互作用という観点を基に検討する。自己査定は、自分自身についての正確な情報を得ようとすることである。一方自己高揚は、自己にとって好ましい情報を求めたり、自己の肯定性を維持しようとすることである。近年、この2つの動機を統合的に捉える試みとしてSCENT (Self Concept Enhancing Tactician: 自己概念高揚戦略)モデル (Sedikides & Strube, 1997) が提唱されている。このモデルの基本的命題は、

人は基本的に自己高揚に向けて動機づけられており、その動機を満たす戦略として自己査定が用いられる場合があるというものである。

そこで本研究では、このSCENTモデルの理論的背景を用い、自己評価過程についての包括的理解を図ることを目的とした。特に第1章では、3つの視点からの検討の必要性を指摘した。まず、状況の特質に応じた自己評価動機の顕現化と自己関連情報の収集行動としての他者選択の様相の検討である。次に、個人特性として自尊心を取り上げ、低自尊心者がとりうる自己評価過程の様相が状況の特質とは合致しないものとなり、それが適切ではない自己評価過程の遂行を低自尊心者に生じさせている可能性の検討である。最後に、自己評価過程において、状況の特質に適合した他者選択が、精神的適応に及ぼす影響過程の検討である。これらの検討を通して、自己評価過程の包括的理解を行うことの意義について提案した。

第2章：自己評価動機と自己関連情報の収集行動としての他者選択との関連性（1）

- 出来事の特質の差異が自己関連情報の収集行動としての他者選択に及ぼす影響 -

第2章では、日常起こる出来事の特質と自己評価過程との関連性を、次のような仮説のもとに検討した。一つは、課題遂行に関連した出来事の生起は自己査定動機を顕現化させ、人はふだん客観的であると認知している他者を相互作用の相手として選択するだろうということである。次に、社会情緒的な出来事の生起は自己高揚動機を顕現化させ、人はふだん情緒的であると認知している他者を相互作用の相手として選択するだろうということである。そして、課題関連出来事が起こった時には、客観的な他者の選択から情緒的な他者の選択に変化していくにもかかわらず、社会情緒的な出来事が起こった時には、情緒的な他者の選択が優勢なまま維持されるだろうということである。総計226名の学生が2つの出来事のいずれか一方を想定する質問紙に回答した。その結果、出来事が起こった直後は、課題関連出来事を経験した時には情緒的な他者よりも客観的な他者を選択し、社会情緒的な出来事時には客観的な他者よりも情緒的な他者を選択することが明らかとなった。また他者選択を続けて行うにつれて、課題に関連した出来事を経験した時には、情緒的な他者を次第に選択するようになったが、社会情緒的な出来事を経験した時には情緒的な他者を一貫して選択していた。これらの結果は概ね仮説を支持するものであった。自己評価過程における他者選択と自己開示の関連性や、本研究の結果がシナリオのインパクトの影響を受けたという代替説明に対する反論、および今後の研究の課題について議論した。

第3章：自己評価動機と自己関連情報の収集行動としての他者選択との関連性（2）

- 日記式質問紙を用いた日常生活における相互作用の検討 -

第3章では、自己評価過程の様相を日常生活の中での相互作用の中で検討するために、日記式質問紙を用いた検討を行った。32名の看護学校生が3日以上質問紙への回答を行った。課題遂行に関連した出来事を経験した際に、相互作用対象として実際に選択した他者の属性やそのときの自尊心、また顕現化していた自己評価動機についての回答が求められた。分析の結果、以下のことが示された。(1) 課題遂行に関連した出来事を経験した時に自己査定動機が顕現化すると、客観的な他者の選択が多く行われやすくなる。(2) 低自尊状態であっても高自尊状態であっても、自己評価動機の顕現化については同程度の割合で生起しており、自己に関連した情報を能動的に求めようとする志向性は高自尊心者も低自尊心者も持っている。(3) 高自尊状態では、客観的な他者の選択が多く行われる

傾向にあり、状況の要請と適合した他者の選択が行われやすい。一方、低自尊状態では情緒的な他者の選択が多く行われる傾向にあり、状況の要請と適合した他者の選択が容易には行われにくい。以上の結果から、自尊心の程度の違いにより、自己評価過程における他者選択の様相が異なる可能性について示唆がなされた。

第4章：自己評価動機と自己関連情報の収集行動としての他者選択との関連性（3） - 熟慮マインドセット時の自己評価動機の顕現化と他者選択の様相についての検討 -

第4章では、第3章で指摘された、自己評価過程における自己評価動機の顕現化の様相と他者選択の様相が、高自尊心者と低自尊心者では異なる特徴を示す可能性について、詳細な検討を行うため、マインドセット理論 (e.g., Taylor & Gollwitzer, 1995) のパラダイムを援用した検討を行った。

自己評価過程において、低自尊心者が自己の周囲の情報を収集しようとすることに関して、Wood and Lockwood(1999)は、低自尊心者や抑うつ傾向者などの低自負者の社会的比較の様相をレビューした。彼らの示唆から、低自尊心者が自己に関連した情報の収集を志向する、すなわち自己査定的な動機が高まるが、実際の情報収集の時点では異なる動機による影響を受ける可能性があることが想定された。そしてその際には、自己防衛のバイアスを受けた選択が行われるのではないかと予測した。

そこで、複数の自己評価動機が顕現化しやすいと考えられる状況を設定し、その際の動機の顕現化の様相を検討した。そしてその際に自己評価動機がどのような顕現化の様相を示すのかを準実験的手法を用いて検討した。調査実験に参加した102名の大学生・短大生のデータが分析に用いられた。彼らには、将来の就職のことについて実際に思考させ、その後自己評価動機を質問紙上で測定し、他者選択を行わせた。その結果、低自尊心者は相対的に長時間思考した際には、自己査定動機の顕現化の程度を持続し続けるが、その際に選択する他者の属性は客観性に乏しい人物であることが明らかとなった。さらに、自己査定動機と同時に自己防衛動機も顕現化していることが示された。これらのことから、低自尊心者が長時間の思考をした場合、正確性への志向性を有しているが、情報の獲得は自己防衛のバイアスを受けていたといえる。低自尊心者の判断の質の問題や、状況の要請に応じた情報獲得の可能性について議論された。

第5章 自己評価過程における他者選択と精神的適応との関連性

第5章では、自己に関連した情報の資源提供者として選択した他者の属性と、個人の精神的適応感との関連性を縦断的な調査手法を用いて検討した。状況の特質に応じた情報を提供してくれると見なしている他者を選択することが個人の精神的適応を促進すると予測した。また、この効果は自尊心によって調整され、低自尊心者では選択と精神的適応との影響過程が認められないだろうと予測した。縦断的調査に基づく122名の看護学校生のデータを分析し、概ね仮説は支持された。課題に関連した出来事を経験した時に客観的な他者を選択し、かつ社会情緒的な出来事を経験した時には情緒的な他者を選択することが最も精神的適応への促進効果が認められた。さらに、この効果は低自尊者においては認められなかった。加えてこれらの結果について、社会的ネットワークの大きさなどの代替説明の可能性は立証されなかった。状況の特質に応じた他者の選択が、自己評価過程において重要であり、そのことが個人の長期的な適応状態に影響を及ぼすことが明らかとなった。

第6章：全体考察と今後の課題と展望

第6章では、本研究における一連の検討の結果、自己評価過程に関して得られた一連の知見を総括した。検討の結果、本研究の主要な知見として、状況の特質に応じて、顕現化する自己評価動機が異なり、それに依拠して自己関連情報の収集のために選択する他者の属性も異なるということが示された。さらに、状況の特質に適合した属性を持つ他者を選択することが、自己の精神的適応にポジティブな影響を及ぼすことも示された。加えて、この一連の自己評価過程を、低自尊心者は適切に遂行することができないことが示された。そしてその理由は、顕現化した自己査定動機を満たすような他者選択ではなく、自己防衛動機に即した他者選択を行っているからであることが明らかとなった。この知見に基づき、低自尊心者に対していかなる働きかけを行えば、彼らが自己評価過程を適切に遂行することができるようになるのかについて議論した。最後に、より具体的な今後の課題や問題について、複数の視点から言及した。

引用文献

- Sedikides, C. & Strube, M. J. (1997) Self-evaluation: To thine own be good, to thine own self be sure, to thine own self be true, and to thine own self be better. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 29, (pp. 209-270). California: Academic Press.
- Taylor, S. E., & Gollwitzer, P. M. (1995) Effects of mindset on positive illusion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 213-226.
- Taylor, S. E., Neter, E., & Wayment, H. A. (1995) Self-evaluation processes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1278-1287.
- Wood, J. V. & Lockwood, P. (1999) Social comparison in dysphoric and low self-esteem people. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems*, (pp. 97-136). Washington DC: APA. (R. M. コワルスキ・M. R. リアリー (編著) 安藤清志・丹野義彦 (監訳) 臨床社会心理学の進歩 北大路書房).